

はじめに

八千代市村上の辺田前公民館（村上南 2 丁目 14-24）の庭内には、十九夜塔や子安塔などの石塔が 13 基立ち並び、地域の女性たちの祈りと親交を物語っている。

これらの女人講に関連する石塔については、『史談八千代』37 号掲載の拙稿「八千代市村上地区の女人講石造物」の中で、その概要を報告したが、今回はこの辺田前公民館の石塔のうち、浅間内遺跡の発掘調査で出土しここに移された十九夜塔 4 例についてより詳しく報告したい。

辺田前公民館に移された十九夜塔 4 基は地蔵像塔 1 基とともに、この地域の暮らしと環境の変化により忘れられて破棄され、再開発時の発掘調査で再び姿を現したという数奇な運命を持つ。そしてその経歴を示すように、風化に加え重機による損傷が著しく、その像容は原形をとどめていない。幸い、浅間内遺跡の調査報告書（常松・中野 2007 p 217～ 219）に記載され、この報告書の文中にもあるように、埋蔵文化財であるが十九夜講に裏打ちされた「無形文化財」として元の場所（辺田前公民館）に戻され、地域の女性たちによって近現代の子安塔と共に大事にされて、「広義の解釈において文化財保護」されている。

これらの十九夜塔 4 基について建立された当初、その姿はどのようなであったか、またその建立の時代背景として、女人講造立の石塔の時代的な変遷について述べていきたい。



図-1 遺跡から辺田前公民館に移設された石塔群 左から報告書の石塔 3. 4. 5. 1. 2.

1. 浅間内遺跡と石塔類の検出地点

浅間内遺跡は、市域南部、新川の東岸の台地上に位置し、現在は八千代市村上南 2 丁目の 14～28 とその北側の隣接地で、住宅街や道路などになっている。「浅間内」の小字名は、遺跡西端、現在はそのすこし北に遷された「浅間神社」の鎮座に由来する。

この遺跡については、東葉高速鉄道村上駅周辺の辺田前土地地区画整理に伴い、平成 6 年（1994）から平成 16 年（2004）まで約 23,000 m²の発掘調査が行われ、旧石器時代から縄文草創期～後期・弥生・古墳・奈良平安の各時代の住居跡や建物跡、前期古墳、縄文時代の狩猟用落とし穴のほか、中近世のピットや溝も多く検出されている。

近世の石塔類は、第 6 次確認本調査（平成 12 年 10 月～11 月）の際、浅間内遺跡の南端のトレンチから検出されたもので、この地点は、辺田前公民館の数十メートル北の斜面、現在の村上南 2 丁目の 15 と 17 の間の都市計画道路付近と推定される。なお、第 6 次確認本調査では他に、奈良時代の住居跡の遺構と江戸後期の内耳焙烙が出土している。

石塔類は、元の場合に立っていたという石造地藏立像 1 基と、トレンチ（20T）から掘り出された元文 2 年（1737）銘の十九夜塔、文化 13 年銘の十九夜塔、記年銘不明の十九夜塔 2 基の計 5 基が調査され、前述のとおり、辺田前公民館に再建されている。

ちなみに辺田前公民館は、「辺田前」の地名が示すように、新川から黒沢池に入り込む低地の水田に面する微高地にあり、延享 3 年（1746）の「村上村明細差上帳」幕末の「村上絵図」に記載された宇那谷大聖寺末寺の真言宗の蓮葉寺の廃寺跡である。

2. 掘り出された十九夜塔の現状と建立当初の姿

1. 元文 2 年（1737）銘の十九夜塔（報告書 P218 の 2. ）

安山岩製舟形光背の彫りの深い浮彫で中央に二臂の如意輪観音像、右上から「奉納十九夜講中二世安樂祈所」、左上から建立年月日、像の上に梵字（サ）、像の下 3 面に「おくに」など 23 名（判読可の数、他に不可を入ると数十名か）の女性名を刻む。（⇒写真）

像の右顔面が大きく破損しているが、建立時はどのような像であったであろうか。



この如意輪観音の像容、特に衣紋と、また右側の「二世安樂」の願文を含む銘文は、江戸初期からの伝統的な形式を継承しているが、これ以降、八千代市内では「二世安樂」の願文はほとんど記されなくなり、宝暦ごろから（1751～）は皆無となる。

如意輪観音像の下部に講に結衆する女性名を記すのは、高津観音寺の延宝二年（1674）銘の十九夜塔など、この時期までの丁寧な造りの石塔によく見られ、この石塔に先立つ元文元年（1736）銘の村上正覚院の如意輪観音供養塔（十九夜塔か）には、13 名の女性名がカタカナで記されている。

次ページの図-2 には、この元文 2 年の十九夜塔と同時期の近隣の類似する十九夜塔を示した。建立時は元文元年の村上正覚院の石塔に類似した優れた像容の如意輪観音像であったと思われ、江戸中期のこの地域の十九夜塔典型例として貴重な事例である。

図-2

元文 2 年浅間内遺跡の十九夜塔と

同時期の船橋市東部～印旛地域の十九夜塔



享保 20 年 (1735)

本埜村 笠神熊野神社



元文元年 (1736)

八千代市 村上正覚院



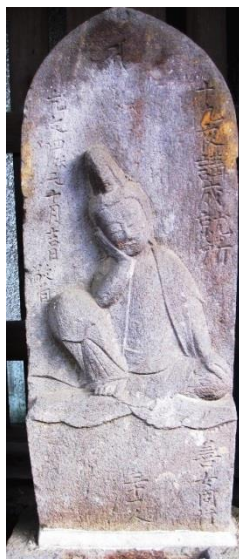
元文 2 年 (1737)

八千代市 浅間内遺跡



元文 3 年 (1738)

千葉市 花島観音



元文 4 年 (1739)

船橋市 田喜野井正法寺



元文 5 年 (1740)

船橋市 西船 7 丁目路傍

図-3 文化 13 年銘浅間内遺跡の十九夜塔と類似した特徴を持つ近隣の十九夜塔



文化 7 年 (1810)
白井市 下長殿青年館



文化 8 年 (1811)
八千代市 高津観音寺



文化 10 年 (1813)
船橋市 印内光明寺



文化 13 年 (1816)
八千代市 高本国蔵院



文化 13 年 (1816)
八千代市 浅間内遺跡



年不明 (文化 8~13 年ごろか)
船橋市西船 3 丁目 正延寺

2. 文化13年銘の十九夜塔（報告書の3.）

光背の右に「□□（十九）夜講中 四十七人」、左に「文化十三子三月吉日」の銘のある如意輪像塔で、顔面と両膝より下の部分が破損しているが、よく観察すると、左手に未開敷蓮華を持ち、頭部は宝髻に宝冠をつけ、冠を結ぶ冠帯を蝶結びにし肩へ垂らしている華麗な像である。（⇒写真）

近隣で、同時期の十九夜塔を調べてみると、前ページ図-3のように、類似した像容を見出すことができる。

白井市と船橋市の像では冠帯が放射状に広がり、一方、本例と高本国蔵院の六臂像では頸部に沿って垂れるが、とも冠帯に特徴のある像容で、女性的で華やかな印象を受ける。

また未開敷蓮華をもつ二臂像は、江戸初期ではほとんどないが、江戸中期からは見られはじめ、江戸後期ではこのように半数以上が未開敷蓮華を持つ。



文化文政期は、如意輪観音像の十九夜塔の造立が下降期に入る時期であり、図-2のような典型例の如意輪観音像も少なくなり、代わって未開敷蓮華を持ち、または天衣を翻すなどの華麗な変形例が登場してくるが、像容として優れているものはまれである。さらに幕末から近代にかけては、子供を持つ像の子安像塔が増え、如意輪観音像をしのぐようになる。

浅間内遺跡出土のこの塔がどのような像容であったかを、図-3の事例から推定すると、高本国蔵院の像のような宝冠をつけ、冠帯が肩まで垂れた優しい女性的な顔立ちの像であったと思われる。下部は損傷が著しいので不明であるが、高本国蔵院や高津観音寺の事例のように、衣の裾の襷が放射状に広がっていたかもしれない。

またこの十九夜塔に記された文化13年の銘は、船橋市西船3丁目の正延寺に並ぶ優れた十九夜塔3基のうち、紀年銘がなく特徴点がこの塔によく類似した十九夜塔に、文化8～13年ごろという年代を与えることができるであろう。

華麗な化政文化を反映する十九夜塔として、またその記年銘により他地域の十九夜塔の編年に寄与する有意義な石塔である。

3. 年不明の十九夜塔2基の像容の特徴と、各類似例

造立年不明の2基について、その像容の特徴点から類似した事例を検討してみた。

報告書の4.の十九夜塔は、光背の右上に「十九夜」の銘がある。左上の文字は、報告書では、「左面全体破損により銘文判読困難。安政か？安政は、西暦1854～1859年」と記載されている。

「面部・右腕・足ひざ破損。右足先破損」状態で光背中央に残された如意輪観音浮彫

像の像容をよく観察すると、乳房の浮彫・両ひざの角度・右手に持つ蓮華の形状・右脇に翻る天衣・光背上部のスペースに特徴があり、近隣では高津観音寺の弘化2年(1845)銘の十九夜塔が類似する。「安政」と読めるかは自信がないが、両塔の像容の特徴の類似点から、安政期を含む江戸末期の造立であろうと判断される。

図-4 年不明の十九夜塔とその類似例

			
報告書の 4. (安政か?)	弘化 2 (1845) 高津観音寺	報告書の 5. の石塔	文政 2 (1819) 武石真蔵院

報告書の 5.で「(十九夜塔) 如意輪観音」の遺物名で記載されている石塔には、「肩より上部欠損」した如意輪観音像と、その右に「□月吉日」、左に「村上村／□(両?) 辺田前」の銘が残る。胸から下のプロポーションから判断するよりないが、右膝と腕の角度、左膝の高さ、肩にかかる衣と左足脇の衣のやや深い彫り方に特徴がある。

近隣の例では、武石真蔵院の文政2年(1819)銘の石塔の像容にその特徴点が類似する。(なお、武石のこの石塔は「子安観世音」銘があるので「子安塔」にも分類される他に事例のない珍しい如意輪観音像塔である。)

浅間内遺跡から出土したこの如意輪観音石塔も、おそらく武石の石塔が造立された文政2年前後に、十九夜塔として建てられたものと推定される。

図-5 千葉県北部の十九夜塔の分布と推移

石田年子氏調査データ（房総石造文化財研究会主催 2011 年第 17 回石仏入門講座）から蕨が整理・集計・作図

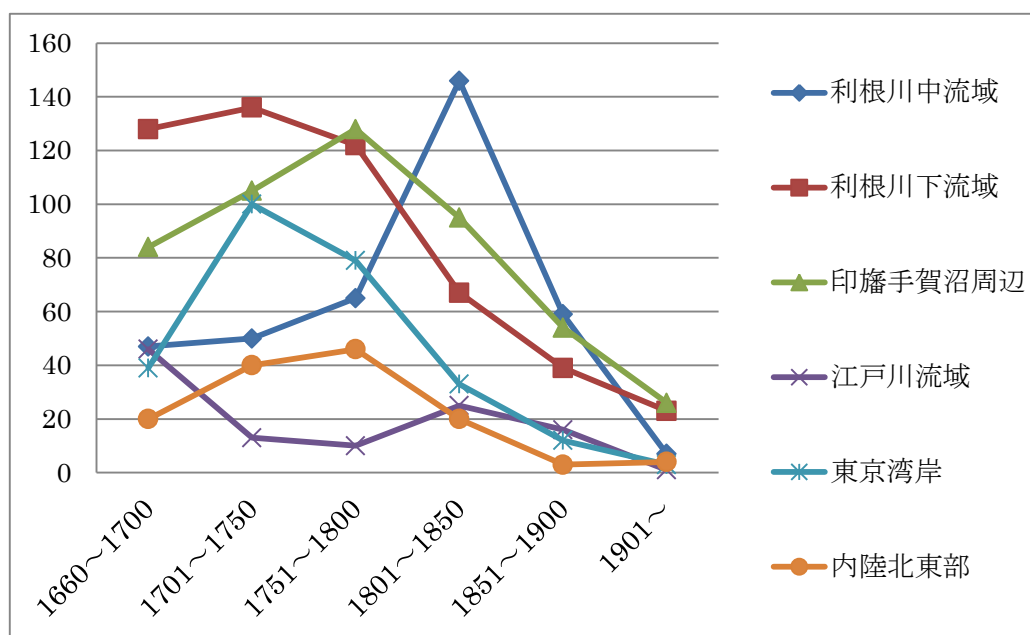
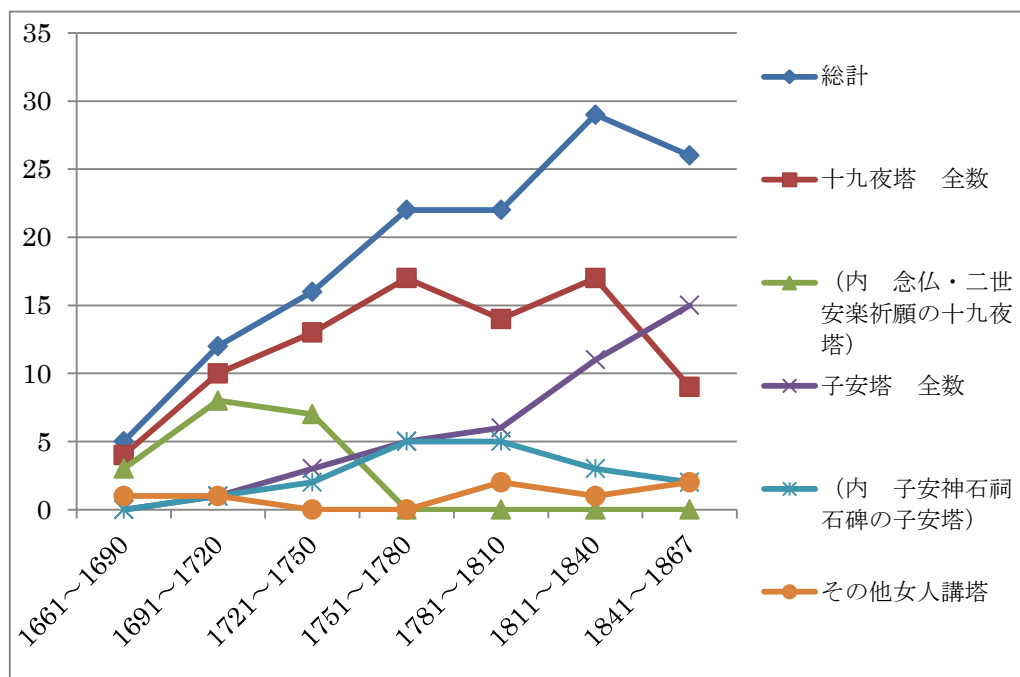


図-6 八千代市域の江戸時代の女人講石塔の変遷

（蕨由美の調査データに基づく）



3. 浅間内遺跡の十九夜塔の時代背景

以上のように、浅間内遺跡出土の十九夜塔は、元文 2 年（1737）、文化 13 年（1816）のほか、弘化 2 年～安政期（1845～1859）と、文政 2 年（1819）前後に建立された 4 基と推定される。

これらの造立の背景となる千葉県北部の十九夜塔の分布と推移を図 - 5 で、八千代市域の江戸時代の女人講石塔の変遷を図 - 6 のグラフで示す。

八千代市域における十九夜塔の初現は、村上の正覚院境内の頭部を欠いた丸彫りの如意輪観音像である。この背景となる常総における十九夜塔の成立の過程については、本誌前号の「正覚院の十九夜塔と十五夜塔」で報告した。

千葉県北部での十九夜塔建立の数の推移は、図 - 5 のとおり地域差があるが、八千代市の位置する印旛手賀沼周辺では、江戸時代初期（1615～1716）から中期（～1804）にかけて増加し、後期（～1868）からは徐々に減少、近代では他地域と同様にわずかとなる。

八千代市内での十九夜塔が減少に転じる江戸時代後期の傾向を、図 - 6 で分析すると、江戸後期から子安塔の建立が増加し、幕末にその数が十九夜塔建立数を上回ることがわかる。ちなみに八千代市内での、母性を明らかにした主尊が子を抱く子安像塔の初出は、米本の林照院にある文化 11 年（1814）の石塔である。

村上地区の子安塔としては、子安神の石祠として、宝暦 9 年（1759）七百餘所神社古墳の「子安大明神」祠ほか 2 基の石祠があるが、子安像塔は明治 16 年（1883）の正覚院、次いで辺田前公民館の明治 17 年（1884）と近代になってからである。

なお、報告書 5. の如意輪観音像塔の残欠は、昨年度の調査ではその実態がよくわからなかったので、「八千代市村上の女人講に関連する石造物一覧表」（本誌前号 p 84）には入れなかったが、今回の調査により江戸後期の十九夜塔と推定されたので、この表に加え、辺田前公民館の女人講関連石造物数を計 12 基としたい。

以上、本論考で取り上げた 4 基の十九夜塔の調査結果により、辺田前公民館の女人講関連石造物は、江戸期の十九夜塔 6 基と近現代の子安像塔 6 基の計 12 基となり、村上地区の江戸時代の女人講関連石塔の実態をより正しく反映する結果になったと思う。

最後に、浅間内遺跡の発掘調査に際して、このような破棄された近世石造物を的確に保護し、報告書にも記載された八千代市遺跡調査会の担当者に改めて敬意を表します。

参考文献

- 常松成人・中野修秀 2007 『千葉県八千代市浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡』八千代市辺田前土地区画整理組合・八千代市遺跡調査会
- 蔵由美 2012 「正覚院の寛文 11 年銘十九夜塔と享保元年銘十五夜塔について」「八千代市村上地区の女人講石造物」『史談八千代』37 号 八千代市郷土歴史研究会